

都市景観図の形成に関する一考察

——「江戸一目図屏風」をめぐる——

付・「名所風俗図」の研究における諸問題

小澤 弘

はじめに

- 一 都市景観図としての最初「洛中洛外図屏風」
- 二 江戸を描いた都市景観図
 - 「江戸名所図屏風」と「江戸図屏風」——
- 三 景観のシームレス化
 - 歙形紹真筆「江戸一目図屏風」——

- 四 『江都名所図会』について
 - 五 「江戸名所之絵」について
- おわりに
- 付・「名所風俗図」の研究における諸問題

論文要旨

日本の都市景観図は、世界でも独自の展開をとげた。とくに室町後期に成立した応仁の乱後の復興する平安京(京都)を金雲を用いて空間と時間の処理をした「洛中洛外図屏風」は、その嚆矢である。こうした都市景観図は、近世に入っても継承されたが、その代表作は、寛永期の建設途上の武都を描いた出光美術館所蔵の「江戸名所図屏風」と、江戸幕府三代將軍徳川家光の事蹟を顕彰したともいべき江戸とその北郊を鳥瞰した国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」である。この二つの屏風絵は、地理的な主題が新しい権力の拠点「江戸」に置かれたということに比して、その部分的な構図のいくつかは京都への憧憬にあるといつてもよいかもしれない。そして、そのことは、新しい「江戸」の、そして新しい権力者徳川將軍家とそれを支える武家組織の、とりあえず目標とした文化の有り様を示しているといえよう。いわば、その美的表現が桃山様式により表されたものが、この二つの都市図屏風といえるのではないか。

さて、このような都市景観図に対し、近世後期になるとさらに新しい都市景観図が登場する。それが一点透視図法を用い、シームレスで都市景観を疑似的に提示した画である。その代表作が、歙形蕙斎紹真の描いた「江戸名所之絵」、あるいは「江戸一目図」と称される作品である。すでに西洋では、俯瞰都市図の試みや、一四一〇年代にブルネルスキによる透視図法の発見があり、やがて十七世紀には覗きからくりの実験がなされた。こうした手法が、長崎交易を経て日本にも入り、いわゆる「浮絵」の画法が日本の絵画へも大きく影をおとしたことは、周知の事実である。浮世絵における「浮絵」、また円山応挙の眼鏡絵など、数々の作画活動や、覗きからくりの興行が指摘されている。こうした視点からの、新しい日本の都市景観図は、多くの近世人たちに驚きをもって迎えられたことは、多色摺り木版画や銅版画によって多量に生産されたことからも理解されるのである。